

Title	アダム・スミスの商業に対する思想
Sub Title	
Author	向井, 鹿松
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1923
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.17, No.7 (1923. 7) ,p.1189(215)- 1250(276)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	アダム・スミス生誕二百年記念号 雑報
Genre	Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19230701-0215">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19230701-0215</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

於ても事理の透徹を貴び、前後脈絡あり首尾一貫せることを貴ぶ。従て、或る現象を充分に説明せむとする場合には、其の原因に遡り、其の結果に説き下る。上來吾人が考察したる佛蘭西諸學者の所説を見ても、その各々が、それ以前に存せし學說中に於ける矛盾や不徹底を除き、事理を一層深く且つ詳細に闡明するの方向を取つて居ることを發見し得る。此の一事は、佛蘭西に於ける經濟學の一傾向を説明するに叙上の一國民性を以てすることの、妥當なりや否やは兎に角とするも、少なくともその必ずしも不可能ならざるを示して居るのではあるまいか。尤も、明瞭を貴び首尾一貫を重んずるの精神は、往々にして、人をして、物を離れての推理即ち抽象的推論を逞しうして遂に眞實を遠ざかるの危険に陥らしむることあるべきは否み難い。現に吾人は、斯かる思辯の犠牲となりし者の例を Physiocrates に於て發見する。吾人は、經濟學の研究法に關して、事實の觀察による歸納法の重要を力説したる Say の所言 (Traité d'Economie Politique, Edition Guillaumin, p. 3-5) を以て、佛蘭西人に對しては特に意義深きものたるを思ふものである。

## アダム・スミスの商業に對する思想

向井 鹿松

アダム・スミスの商業に對する思想は此を次の如く分ちて考察するを便とする。

- 一、商業の生産力に關する學說
- 二、國內商業の組織及び政策に關する思想
- 三、商業及び商人に對するスミスの思想及び感情
- 四、外國貿易に關する學說

此内最後の外國貿易に關する學說は所謂自由貿易の學說として知られてゐる所のもので、其研究の公けにせられたもの内外共に少しもしない。故に余は専ら最初の三個の點に就いてスミスの思想を探究する。

第一の項目の下に於て余は先づアダム・スミスが其生産的、不生産的労働の區別をなすに、其労働の對象たる財を何故にキャパシンの用ひてゐるやうな Material Object と云ふ字を用ひないで常に例外なく Vendible Commodity と云ふ文字を用ひたかきと云ふ理由を説明する。次いで彼が一般産業の生産力比較の標準としたる點と、各種卸商業の生産力の比較の標準として採りたる點に相違の存することを指摘し、而して此第二の

場合の標準よりして、第一の場合を批判せば、第一の標準の下に一般産業に對してなしたるスミスの生産力の太少及び順序は全く支持し得ざること證せんとする。

第二の項目の下に於ては余は配給組織の職分、配給費用、商人排除運動(直接配給論)、小賣商人數の制限、公定代價政策に關するスミスの議論を紹介し、且つ之を批評せんとする。

第三の項目の下に於てはアダム、スミスの對商人感情としての三個の異説を掲げ、此等の意見、相違は商業、商人、獨占に對するスミスの思想を探るによりて解決し得ることを示さんとするにある。

一

England's Treasure by Foreign Trade (外國貿易は英國の財寶なり)は人の知る如く一六六四年に出版せられたThomas Munの書に與へられた題名である。「商人の富めるは國の富めるなり」と云ふ文句は十五世紀の英國の著書で有名なLibell of Englishe Policyeの中にある一句として知られてゐる。此等の句は十七、八世紀に於ける經濟論者が商業に對して懐いてゐた考を尤も明かに表してゐるものと云ふことが出来る。

然るに「商人の富めるは則ち國の富めるなり」といふ此文句はフィジオクラットの

の出るに及びて次の句を以て置き代へられた。曰く、

Pauvre Paysan, pauvre royaume,

Pauvre royaume, pauvre roi,

と則ち農民の貧富は社會全體の貧富たることを言ひ表はしたるものである。

此等の文句は何れも皆如何にせば國を富ますことが出来るかと云ふ考に其基を發してゐるのである。而して此問題に答へんとして當然起る思惟は如何なる行爲が國の富を増加するか、則ち生産的なりやと云ふ問題である。而してかかる思惟の結果は又當然商業は生産又は生産的なりやと云ふ考に及んで來るのである。商業は生産的なりやと云ふ議論は或る學者も云へる様な實にマーカンチリスト以來最近に到る迄の經濟學の歴史の内での一つの重要な部分を占めてゐて、又從來殆んどあらゆる經濟學者によつて論せられた所である。而してアダム、スミスの富國論中に於て商業に關する學說として最も主要なる部分を占めて居るのは又實に彼の生産力に關する其學說と關聯するものに外ならぬのである。

マーカンチリストは富の象徴たる貴金屬を以て富其物であると解した。彼等

の考によると貴金屬を産する鑛山を有しない國に於て之を得るの道は外國貿易によるの外はないのである。則ち外國貿易上に於ける輸出入の權衡を自國に順ならしむるにある。而して此目的を達する爲めには其輸出入に獎勵又は干渉を加ふるを以て尤も適當なる政策であると考へた。かかる思想の下に於て彼等が外國貿易を以て國民の富の源泉とし、之を尊重したのは當然のことである。然るに之に續いて起つたフイジオクラットは之に反對の考を有してゐた。彼等は合理的に經營せらるゝ土地耕作のみを以て生産的であると解した。而して商工業は之を不生産的のものとして之を輕視せんとしたのである。

斯の如く一方には外國商業を以て富の源泉なりとなすマーカンチリズムの思想があつた。他方には農業のみを以て國を富ます源泉であり、生産的であるとなすフジィオクラットの思想があつた。而して此兩極端の思想に續いて世に出て來たのは則ち英國正統學派の祖アダム、スミス其人である。然らば此偉大なる經濟學者は此等兩思想の間に處して果して如何なる態度を採つたか。これ余が本論文に於て研究せんとする主要なる一部をなすものである。

(註) 以下著者の名を掲げないで括弧内に記載してある著書は富國論で、其數字は其編章及び頁數を示す、凡て富國論キヤナン版によるものである。

## 二

スミスの生産力に關する學説は次のやうに考へることが出来る。彼は先づ各人の貧富は「人が人生の必需品、日用品及び享樂を享けること」の出来る程度によるものである」と考へた。(The Wealth of Nations vol. I, p. 32 in Cannan's edition) 則ち大に人生を享樂し得るものは富者である、其必需品すらも得ること困難なるものは貧者であると云ふのである。然らば此人生の享樂に必要なる生活上の必需品日用品は如何にして之を得ることが出来るかと云ふと、其根源は國民の勞働である(Vol. I, p. 3) 則ち彼等の毎年消費する生活上の必需品は(一)彼等自からの勞働の直接の産物であるか、(二)或は其産物を以て他國から買入れたものである。

人の貧富は必需品、日用品及び享樂を享けること「の出来る程度によつて定まる、而して此等を得るの手段は勞働である」と云ふならば、之を逆にして然らば凡ての勞働は人又は國民を富ましむるものであるか否かと云ふ問題が起つて來る。而

して此問題に對してスミスは否定的の答を與へてゐる。則ち凡ての勞働は國民生活の源泉たる毎年の産物を増加するものではない。又同じく年産物を増加する勞働の中にも其生産能力に相違があるといふのである。今此をスミス自身の言葉を以て云はしむれば、如何なる國にても其土地及勞働の年産物の價值を増加するの道は只其生産的勞働者の數を増加するか、又は從來から働いてゐる勞働者の生産能力を増加するの外はないと云ふのである。(Bk. II, Ch. III, p. 325)之を以て見ればスミスは勞働に二種あり。一は國民の年産物を増加して國民の生活を豊かならしむるもので、二は勞働するも年産物を増加しないものである、従つて後者は國民生活を豊かならしめない、否却つて他人の勞働の結果を消費して國民全體の生活の豊裕の度を減ずるものであると考へた。則ち第一に屬するものは生産的勞働で、第二に屬するものは不生産的勞働である。而して一國の富を増加するには此前者の數を増加するか又は彼等の生産能力を増加するにあると考へたのである。而してアダム、スミスは生産的勞働者の生産能力増進に對しては其方法として分業を論じてゐる。故に吾人は先づ第一に所謂生産的勞働及び不生産

的勞働とは如何なるものを云ふのであるかといふことを知る必要がある。

此問題を解決するにはスミスが生産的又は不生産的と云つてゐるのは何を生産し、又は何を生産しないと云つてゐるのであるか、此點を明かにするならば吾人は彼がなした兩者の區別の標準の那邊にあるかを知ることが出来るのである。則ちスミスの考によれば人が具體的な手に觸れ得可き、又賣却し得る財を其勞働の對象として取扱つてゐる時には其勞働は生産的の勞働である。之に反して奴婢教師、官吏等のやうに、かかる具體的の賣却し得可き財を對象としてゐない勞働は之を不生産的であると云つてゐるのである。此故にスミスは農業、工業、商業は生産的勞働であるが、具體財を目的としない奴婢、軍人、官吏等の勞働は不生産的であると云つてゐる。

然らば何故に彼は所謂 *Vendible Commodity* を對象とするものは生産的であり、然らざるものは不生産的であるとなしたのであるか。彼は富國論第四編第九章に *フイジョオクラットの學說*を批評するに際して明白に此の問題に答へてゐる。則ち彼曰く、彼が第二編第三章に於て職人工業家及び商人は生産的勞働者である

と云つたのは、之れ彼等の勞働は其具體的貨物の内に固着して具體化され、従つて當該財貨は彼等の賃銀及び生活維持(註)の價値を代表するに到るから、(upon this account)である。(Book IV. Ch. IX, vol. II, p. 173)。既に勞働賃銀及び勞働者の生活維持の價値が具體的財貨の内に附着固定し之が前者の價値を包括代表する以上は當該財貨の價値が其勞働を加へられない以前に比し増加するのは又當然である。此故に生産的勞働とは勞働を加ふる財貨の價値を増加(add to the value)する効果を有する勞働であるといふことが出来るわけである。(Book II. Ch. III. vol. I, p. 313)

(註) 此處に生活維持と書いたのは Maintain の譯である。スミスが Maintenance を如何なる意味に用ひたか、之が説明は何處にも見當らない。(Ibid., vol. I, p. 72. footnote.)

然るに奴婢を維持し使用した資財は彼等の勞働によつて其存在を繼續するものでない。彼等の仕事の本質は勤務である。此勤務なるものは普通其仕事をなす瞬間に消失してしまふもので、従つて又其勞働は何等具體的貨物に固着しない。故に當該勞働者の賃銀及生活維持の價値は之に代はる可き何物も有しないから

して勞働と共に其儘失はるゝに到るものである。(Book IV, Ch. IX, vol. 2, p. 173) けれども不生産的勞働は全然何物をも造らないとスミスは考へたものではなからしい。其證據として Canan は次のやうな點を指摘してゐる。スミスは「最も高貴で尤も有用な不生産的勞働でも、將來其と同一分量の勤務と代へ得ることの出来る物を生産しない」又「凡ての不生産的勞働者の仕事は其生産の瞬間に消失する」と云つてゐる。既にスミスが「俳優の臺詞、辯論者の演説、又は音楽家の音調の如く、凡て此等の者の仕事は、其生産の瞬間に消失す」(Book II, Ch. III, vol. I, p. 314)と云ふ以上は彼は俳優、辯論家、音楽家が少なくも臺詞、演説、音調を生産する(produce)ことを否認しないのは明かである。否彼は此等のものを生産するの勞働は一定の價値を有することすら認めてゐる。(同上)而して一定の勞働が價値を有するは其勞働の生産する物に基因する事實をスミスは恐らく否認し得ないからして、若し押して問ふたならば彼は恐らく又臺詞、演説及び音調が價値を有することをも認めただであらうと(註)。

(註) Canan, Theories of Production and Distributions, pp. 21-22.

して見れば一つの勞働が生産的であるか、不生産的であるかと云ふ標準は一つ勞働が或るものを造り出すや否やでなく、又其のものが價値を有するか否かでもなくして、實はキャナンが指摘してゐるやうに生産する物に永續性があるか否かの問題である。一應考へることが出来るわけである。則ち永續性のある具體的財貨なれば勞銀及び生活維持の價値は此物の内に固著、具體化せられて保存せられるが、具體的貨物でない場合には生産と共に消失して一國の資本財を形成しない云ふのである。

けれどもスミスはキャナンが彼の考へとして指摘してゐる永續性、其物に囚はれてゐるのではないのである。換言すれば永續性のあるものほど富であるとは考へてゐないのである。否彼は金銀が永續的財貨である故に、之れを蓄積せば無限の富を得ると考へたマーカンチリスの思想を明かに批難してゐる。而して曰く「吾人は英國の金物と佛國の葡萄酒の交換を主とする貿易を不利益なりとは思惟せず」と喝破してゐる。(Bk. IV, Ch. I, vol. I, pp. 405-406) 然かり金物は葡萄酒よりも永續性を有してゐる。葡萄酒は奴婢の勤務より永續性を有してゐる。永續

如何は畢竟比較的のものである。更にリストの考へによれば人の子を教育する勤務は將來の生産力を増加する、従つて豚を飼ふ人の勤務よりも永續性を有するものと考へることが出来る。故に永續性といふも結局はスミスの議論の絶對の標準ではない。さすればスミスの生産的勞働の標準は依然として其對象が具體的財貨であるや否やで、之を具體的財貨に限るのは具體的財貨は瞬間以上其存在を繼續するからである。世人或は瞬間に消滅するや一秒後に消滅するや、將た又一分後、一時間後消滅するやは必竟程度の差である。故にスミスの生産力説は徹底しないと論ずるけれども、余の見る所を以てすれば斯の如きは決してスミスを正當に解釋したものではないと信ずる。スミスから見れば勞働の成果が瞬間に消滅するや、又は數分後に消滅するやは重大なる問題である、國富の増減の決する所である、而して決して程度の問題ではないのである。何となればスミスが常に頭に置いた所は如何にして國富は増加するやであつた。而して之を増加するの道は(一)生産的勞働者の數の増加(二)彼等の生産能力の増加によるの外はない、而して更に此の二つは共に資本の増加によつて始めて之を實現し得るのであると考

へたのである。(Bk. II. Ch. II., vol. I., p. 325) 然るに此資本を増加するものは吝嗇である。(Ibid., p. 320) 即ち消費してはゐけない。節約しなければならぬ。然るに勞働の結果が直ちに其瞬間に消滅したのでは節約の餘地は存在しない。萬一生産せられて少の間でも存在してをれば、其間に氣が變つて之を節約し又は賣却して資本となすことが出来るのであるが、即時に消滅したのでは消費か節約かそれを選択するの餘地がないのである。此故に生産の結果が瞬間以上存在するや、將た又數分の後に消滅するやは少なくともスミスの考を以てすれば程度の差ではなくして、實は消費と節約の分かるゝ境であり、富の増減の繋る所のものである。換言すれば生産的なるや否やの標準となるものである。余はかく解することに、よりて初めてスミスが具體的財、又はキャナンの云つてゐるやうに物質財(Material Object)と云はないで、常に必ず賣却し得可き財(vendible Commodity)と云つた理由が解せられると思ふ。蓋し消費財も賣却して資本として之を生産に利用することが出来るからである。而して斯の如く解するによりて始めて余はスミスの生産力説を正當に解釋し得たものと思ふ。

けれども生産の意義を論ずるのは本論の經茲に國民只吾人は目的ではない。濟的生产力の特徴を以て貨幣にて表はされたる購買力の増加と見るマーカンチリストから、之を人性の目的に有用なる自然的産物を、之を得るに際し費やした費用以上に増加するに在りとなすフイジオクラットに到り、次いで起つた彼れスミスは之を、物的財貨の内に具體化し其財貨の交換價值を、之に費やしたる費用價值以上に高むる凡ての行爲に求めたことを記するを以て満足する。(註)

(註) Philippovich, Wesen der volkswirtschaftlichen Produktivität, Schriften des Vereins für Sozialpolitik, B. 132, S. 34f.

以上述ぶる所によつて余はスミスが生産的勞働と不生産的勞働とを區別した其標準及び理由を説明したつもりである。故に余は論を始めに歸へして國民の富に對する彼の思想の大略を一言して此項を終りたい。スミスは國民の貧富は生活上の必需品、有用品、享樂を享受し得る程度による。然るにかかる必需品、有用品、享樂を人に與ふる道は勞働によるの外ない。けれども凡ての勞働は國民にかかる道を開くものではない。國民の生活を豊かならしむる年産物を生産するものは只生産的勞働のみに限るのである。所が國民中には此外不生産的勞働に従

事するもの、及び全然勞働に従事しないものがある。而して此等の人々を養ふものは皆生産的勞働の結果たる年産物である。此故に生産力を同一のものとなせば一國に生産的勞働に従事する者の數が不生産的勞働及び全然勞働しない人々の數に對して大なれば大なるほど國は富み、之に反對の場合には國は貧しくなると云ふのである。

## 四

茲に於て余は初めて商業の生産力の問題に就て論ずる順序となつた。商業は具體的貨物を取扱ふ勞働である。故にスミスが商業を生産と認むることは前説明した所によつて既に充分明かにせられたことと思ふ。又實際スミスが其思想の甚だ多くをフィジオクラットより承け繼いでゐるにも拘はらず、尙且つ彼が國富論第四編第九章に此學派を論ずるに際し、彼等の主要なる誤謬として指摘した所は實に彼等が農業のみを以て生産的とし、工業及び商業を不生産的であるとした一事に外ならなかつたのである。(Book IV, Ch. IX, vol. II, p. 172) 而してスミスは此フィジオクラットの議論の誤まれる理由として左の四つの點を指摘し、以て

商業、工業も亦農業と同じく生産的であることを主張したのである。(Bk. IV, Ch. IX, vol. II, pp. 172-176)

一、工業及び商業に従事するものはフィジオクラットも認めるやうに毎年少なくとも其年に自から消費した價值を再生産する。故に彼等を維持してくれた資本の高を減少せしむるものでない。農業の生産の力が商工業に優るの故を以て商工業の生産力を否認するは不可である。

二、商工業は奴婢の勞働とは異なる。彼等の勞働の價值は賣却し得可き貨物の中に具體化せられて保存せられる。

三、假令商工業の生産する價值はフィジオクラットの主張するやうに其費やした價值と同一なりと假定しても、之を以て直ちに社會の實収入が増加しなかつたと云ふのは妥當でない。蓋し商工業が生産しなかつた場合にはそれ尙富は減ずるからである。

四、農民と雖も商工業者と同じく節約に依らないで社會の實収入年收穫を増加し得るものでない。蓋し一社會の土地及び勞働より生ずる年收穫は第一生産的

勞働者の生産能力の改善、第二生産的勞働者の増加と云ふ二つの方法によつてのみ増加し得るものである。然るに生産能力の増加は(一)勞働者の技能の上進、及び(二)器械の使用改良によるものである。然るに此等は分業によつて尤もよく發達するものであるが、農業では工業の如く分業が細かに行はれない。

又生産的勞働者の増加は全然此目的の爲めに用ひらるゝ資本の増加によるものである。而して此資本の増加は収入より貯蓄せられた高と同一のものであるからして、若し彼等の考へるやうに商工業者が農民よりも儉約、貯蓄の念に富むならば、却つて農民よりも多く社會の實収入を増加することが出来るわけである。

五、最後に一國の國民の収入は彼等の信ずるやうに其産業の産出する生活資料(Subsistence)の高よりなるとしても、商工立國主義の國の収入は農業立國主義の國より大である。蓋し前者は其國の生産高よりも以上の高を他國より輸入し得るからである。

斯の如き見地からしてスミスは特に四種の生産業を擧げてゐる。(一)原始生産業(農、林、鑛、漁業等)(二)工業(三)卸商業及(四)小賣商業是である。(Bk. II, Ch. V, vol. I, p. 340)

スミスは更に曰く「此等四種の生産は何れも皆各、他の三種の産業の存立、擴張の爲めにも、將た又社會一般の利益の爲めにも必要缺く可からざるものである」と。(Bk. II, Ch. V, vol. I, p. 340)。此文句は最も明白に商業の國民經濟上に於ける地位と其必要を言ひ表はしたものであつて、商業の生産力に關する問題はこれで充分であつたのである。然るにスミスの議論は尙茲に止まらなかつた。彼は更に此等四種の産業の生産力にそれ／＼大小の別を設けて之に上下の區別をつけたのであつた。斯の如くスミスがフィジオクラットに反對して折角商業の生産力を認めたとにも拘はらず、更に又各種産業の生産力に區別を設けて、後述する如く農業を第一に、商業を最後に置き、再びフィジオクラットの思想に近き傾向を示したのは何故であらうか。

## 五

此問題を解決する爲めには余は再び國富の増加に關するスミスの根本思想を今一度簡單に繰返へすことを許されなければならぬ。蓋し彼が商業の生産力を他の産業に比し之を下に置いたのは商業の國富の増進に貢獻する程度が他の産

業より劣つてゐると考へたに外ならないからである。

既に再三述べたやうに國富増進の根源をなす所の、一國の土地及び資本の價値の増加は只二つの方法によつてのみ之を見ることが出来る。第一、生産的勞働者の數を増加するか、第二、又は生産的勞働者の生産能力を増加するか何れかである。第一の生産的勞働者の數の増加は資本の増加、則ち生産的勞働者の維持に當てられる基金の増加なくして此を見ることは出来ない。第二の生産能力の増加は(一)一層適當なる分業を行ふか、(二)又は勞働を容易又は簡便ならしむる器械器具の増加、改良に依るの外はないのである。然るに分業を行ふことも、亦器械器具を使用すること共に資本の増加を必要とするものであるから、第一の場合でも、又第二の場合でも共に先づ資本の増加を必要とするものである。(Bk. II, Ch. III, vol. I, pp. 325-326, and vol. II, p. 174)而して資本の増加はスミスによれば吝嗇によつて増加するもので勤勉によるものでない。(Bk. II, Ch. III, vol. I, p. 320)

是に依れば一國の富を増加するのは資本の増加に依るの外はない。而して此事はスミスが其富國論に於て到る處に繰り返へして論じてゐる所である。けれ

どもスミスの此議論は「他の事情にして同一ならば」といふ一定の制限の下にあるものと解す可きものである。而して其制限をスミスは第二篇第五章に説いてゐる。則ち資本の高は同一でも之を以て維持し得る生産者の數は其用途によつて異なる。従つて同一の資本でも多數の勞働者を維持し得る産業に投ずれば一國の年收穫を増大することが出来る」と云つてゐるのである。則ちアダム・スミス自身の言葉で之を云つて見ると「凡ての資本は只生産的勞働者のみを維持する爲に當てられてゐるものであるが、而も同一の資本が動かすことの出来る其勞働の分量は其資本の用途の種類の異なるに従ひ甚だしく相違するものである。同様に資本の使用によつて増加する其國の土地及び勞働の年收穫の價値も亦異なるものである。(Bk. II, Ch. V, vol. I, p. 340)更に又彼は他の處で同じことを云つてゐる、則ち曰く「斯の如くして一國に於ける同一額の資本でも之を農業工業及び卸商業に投ずる割合によつて、夫れ夫れ此資本の動かし得る生産的勞働の分量並びに其土地及び勞働からの年收穫の價値の増加に多少を生ず」と。(Bk. II, Ch. V, vol. I, p. 347)而して彼は資本の用途として農業、工業卸商業、及び小賣商業の四を

擧げ、農業は生産力最も大にして工業之に次ぎ、卸商業の生産力は工業に劣り、而して小賣商業最も劣ると云つてゐる。(Bk. II, Ch. V.)

然らばスミスは如何なる根據からして此等四種の産業の生産力に優劣を附したかど云ふと、それは同額の資本でも其動かし得る労働者の數は農業上の資本に於て最も多く、工業上の資本之に次ぎ、更に卸商業資本に到り、小賣商業資本最も劣ると云ふのである。則ちスミスに云はしむると、小賣商業に投じた資本によつて直接動いてゐる労働者は小賣商人只一人きりである。卸商業資本は商人の外に尙其物品の運送に従事する海員及び運送人を動かしてゐるからして、之によつて動く生産的労働者の數は小賣商業よりも多い。工業家の資本の一大部分は一年又は之よりも遙かに短かき期間に其使用する種々の労働者の間に分與せられるからして、其資本によつて働く労働者の數は商業資本によつて動く労働者の數よりも遙かに多い。最後に農業の資本によつて動く労働者は工業資本の下に於ける數よりも大である。蓋し農業資本の下に働くものは農業上の雇傭労働者の外に尙家畜(彼は家畜にも生産的労働者 Productive labourers と云ふ字を用いてゐる。)

が働いてをり。更に之に自然が加つて其労働を助ける。自然が共働する結果として農業上に於ける労働者及び労働せる家畜は單に其主人が之等を維持する爲めに費やした資本と利潤を生産するのみならず尙之以上を生産する。普通の地代即ち是である。同一の資本を工業上に用ひても決して斯の如く大なる再生産をなすことは出来ない。各種の資本の用途中農業は尤も多く社會に利益を齎らすものである。(Bk. II, Ch. V., vol. I., pp. 242-244)

斯の如くしてスミスは商業特に小賣商業の生産力の最も劣れることを論證せんとしたのであるが此に對しては批難をなす可き點がないではない。(註)

(註) Cannan, *ibid.*, pp. 87-89.

第一、スミスが自から提出した問題は同一單位の資本が幾何の労働を働かすやであつて、一人の人が幾何の労働を用ふるかの問題ではない。故にキャナンも云へるやうに小賣商人は一人の使用人をも使用せず、工業家は二十人を使用すると云つても、若し工業家一人の資本が小賣商人の資本の二十倍以下であることを知らなければ此議論の證明にはならない。

(二) 更に又同じ農業、工業又は商業であつても一定の資本の用ひ得る労働者の數は同一とは云へない。例之同じ農業でも土地の種類、耕作物の種類に依て異なり、又同じ工業でも器械及製造品の異なるに従ひ同額の資本の用ひ得る労働者の數は當然異なるわけである。以上はキャナンが指摘してゐる所であるが此外尙

(三) 一定の資本の使用し得る労働者の數は資本の回轉總高と大なる關係を有するものである。故に同じ商業でも資本の回轉高大なるものはより多くの労働者を使用し得るものである。蓋し資本の回轉大なる時は固定資本及び流動資本の價值は商品に加はりて急速に回收せられるからして何等原資本少なきを憂へないからである。

然らばアダム、スミスは資本の回轉高が生産力に及ぼす影響には氣が付かなかつたかと云ふと全然そうではない。彼は一般資本の回轉に就ては此點に關し特に説く所はないが今日の經營學上の言葉で回轉を論じたものと稱し得可き場所が富國論を通じて第三編と第四編に於て此點に關し數句を費やした所が三ヶ所がある。而してそれは短距離の國との間に於ける商業が利益であると云ふ理由

として説いたものである。則ち第一彼が英佛貿易の利益を主張したのは此の理由からである。佛國は英國に最も近い國である。英國の南沿岸と佛國の北及西北沿岸との貿易は内國貿易に於けると同様の方法で其資本の回轉(returnsは本來商品を他に送りて賣却し、之の代はりに其他の物を仕入れて歸つて來る其商品の分量を云ふものであるが、現代では賣却した物に對して貨幣を受取ることを云ふので理由は全然同じきものである。判かり易き爲めに假りに回轉と譯して置く)は一ヶ年に四回乃至六回出來る。従つて此貿易に用ひられた資本は、他の遠距離に在る多くの外國との貿易に投せられる資本に比し英佛何れの國に於ても四倍乃至六倍量の産業を維持し、且つ四倍乃至六倍の人数に職業と生活資料を興ふることが出來るだらうと。(Bk. Ch. VI, III, vol. I, pp. 459-460) 殖民地貿易を述ぶるに際して彼は亦同じ思想を述べてゐる。則ち曰く、一ヶ年正規に回轉する國內消費の外國貿易に用ひらるゝ一千磅の資本は、其國內に於ける一千磅が一ヶ年維持し得ると同一量の生産的労働を自國內に於て絶えず使用することが出來る。若し一ヶ年に二三回回轉すれば此一千磅は二、三千磅が一ヶ年自國に於て維持し得る

と同一量の勞働を絶えず雇傭し得るものである。(Bk. IV, Ch. VII, vol. II, p. 101) 是に依つて觀れば同一量の資本も其用途によつて其の使用し得る勞働者の數が異なる。此故に商業資本は最も勞働を動かすことが少ないから其生産力最も劣ると云ふスミスの議論は前述のキャナンの指摘した二點に於て既に支持することが出来ないものであるが、余が茲に擧げ資本回轉高から云つても亦支持することの出来ないものである。否余はスミスの生産力説の此點はスミス自からが甚だしき矛盾に陥つてゐるものであると思ふ。此點を明かにする爲めに吾人は尙スミスが同じく商業でも其種類によつて國富に對する貢獻に相違ありと述べた説を聞かねばならぬ。

## 六

スミスは農、工、商の間に生産力の大小の區別ありと論じたばかりでなく、尙同じ商業の内でも卸商業と小賣商業にも其區別の存することを主張したこと前述した所である。然るにスミスは更らに進んで卸商を國內貿易、外國貿易、運送貿易の三種に區別し、資本を其何れに投ずるやに因りて國富の増加に相違あることを論

じてゐる。(Bk. II, Ch. V, vol. I, p. 347) 則ち彼の説によれば第一の卸商等に投せられた資本は第二のものよりも國富を増加すること多く、第二の資本は第三に投せられたる資本よりも國富を増加すること大であると云つてゐる(Bk. II, Ch. V, vol. I, p. 351.)

今彼が其理由として掲げた處を簡單に述べて見る。國內貿易に従事する者は普通一つの場所に買つて他へ賣り、此處に又物品を買つて持ち歸へるから、國內商業に投せられたる資本は從來生産的勞働を動かしてゐる二つの農民又は工業家の資本を回轉さすものである。従つて農工業は其爲めに繼續して其業を營むことが出来る。(Bk. II, Ch. V, vol. I, p. 348)

國內消費用の外國貨物を購入する商業に投せられたる資本は内國品を輸出して行ふ場合には前者と同じく二つの相隔てる地にある資本を回轉するけれども、此場合之に關係する國內産業は只一つであるから、よし資本の回轉總高が國內貿易と同一と假定しても、此資本によつて自國の産業を奨励する度は國內貿易の二分の一である。(Bk. II, Ch. V, vol. I, p. 348)

更に國內消費用の爲めの外國貿易が迂回的方法で行はれる場合がある。例之英國が露國の麻を輸入するに直接英國の製造貨物を輸出して之と交換しないで、先づ之をヴァージニアの煙草と代へ、此煙草を露國に輸出して麻を得るが如き是である。かかる場合には直接貿易の場合よりも二倍大の資本を必要とする。従つて直接貿易の場合よりも其國の生産的勞働を奨励し、扶助すること少ないものである。(Bk. II, Ch. II, vol. I, p. 348)

スミスが茲に運送貿易と云つてゐるのは例之和蘭の商人が波蘭の小麥を葡萄牙に運搬し、此處に葡萄牙の果物葡萄酒を仕入れて之を波蘭に運搬販賣する貿易を云ふのである。故に必ずしも通過貿易ではない。(Bk. IV, Ch. V, vol. II, p. 42) かかる貿易に投せられたる資本は只外國の生産力を維持する資本を回轉せしむる丈であるから、之によりて自國産業を援助しない。従つて此によりて國內の富の増加するの high は只其利潤丈である。尤も其運搬に自國の船、船員を使用する場合には其國の生産的勞働を維持するけれどもそれは必ずしも運送貿易に本質的のものでないと云ふのである。(Bk. II, Ch. V, vol. I, p. 349) 而してスミスは以上此等

三種は其國富を増進せしむる力に於てはそれぞれ優劣があるが、而も之が何等の製作又は無理を加へないで事物の順序として自然的に發達した場合には何れも皆利益あるものであるのみならず必要にして缺く可からざるものであると云つてをる。(Bk. II, Ch. V, vol. I, p. 352)

茲に於てか注意を要するのはスミスが此等の三つの形式の卸商の國民の富を増進に貢献する力に差別を設けた理由と標準は何であるか、それはスミスが前に農業、工業、卸商業及び小賣業の間に優劣を設けた理由及び標準と同一のものであるかどうかと云ふことである。

三形式の卸商相互の間に於ける生産力の優劣を論ずるに際して彼が其理由として擧げたのは資本の Replacement と商業の Returns の遲速の二つである。第一の資本を置き換へると云ふことは賣買によつて買手の貨幣資本が賣主の手に賣主の商品が買主の手に渡ることである。故に買主から見れば資本を置き換へることであるが、賣主から見れば貨幣資本を以て買得又は生産したものが自己の經營外に出て再び貨幣資本の形式をとることを云ふので資本の回轉其物に外ならな

い。故に *replace* と云ふも *returns* と云ふも、將た又 *turn over* と云ふも共に必竟同一の事實を只其考へかたを異にするに従つて言ひ表はしかたを違へたのに外ならぬ。然らばスミスは何故に資本を *replace* すれば生産を補助獎勵するかを考へたかと云ふと、それを商人が農夫又は工業家から買はなければ彼等は生産物を賣却し終る迄生産を中止しなければならぬ、然るに商人が其資本を提供するが爲めに農工業者は絶へず其生産を繼續することが出來ると云ふのである。(The capital of a merchant thereby enables them (agriculture and manufactures) to continue that employment) (Bk. II., Ch. V. vol. I., p. 348)

而して内國貿易では二つの異なる農業又は工業資本を *Replace* するが故に尤も利益であり、外國貿易は只一つの内地農工業上の資本を *replace* するに過ぎないから、其利益は前者に劣り、更に運送貿易は一つも内地農工業資本を *replace* せざるが故に其效果尤も劣ると云ふにあるのである。

所が此理由はスミスが農工商業の生産力の理由とした所とは異なるのである。此場合にはスミスは資本が幾何の生産的労働者を使用 (*employ*) するか、又は動かす

(*put in motion*)かと云ふことを理由とし、標準としたのであつた。所が商業上の資本が農業又は工業の資本を *replace* して、其營業を繼續經營せしむると云ふことと、商業資本が幾何の商業労働者を利用するかと云ふことは全く別問題である。後の場合に於ては商業資本は直接其國の年收穫を増加するが、前の場合に於ては商業資本は工業資本の回轉を大ならしめて年收穫を増加するもので其影響は間接である。此の事はスミスの文字の用ひ方で之を證明することが出來ると思ふ。則ちスミスが農工商の生産力を論ずる時には彼は例外なく常に...the productive labour (or labourers) which the Capital puts into motion (or employs) 資本の動かす(又は用ふる)労働(又は労働者)と云つて、其大小を生産力判断の標準としてゐる。然るに彼が卸商の生産力を論ずる際には一度も其直接影響たることを示す *put in motion* 又 *employ* なる語を用ひないで、又一つの例外もなく凡ての場合に産業に對しより大(又は小)なる獎勵及び援助 (*more (or less) encouragement and support*) を與ふと云ふ文句を用ひてゐる。(キヤナン版第一卷三四八頁下より二行目及び十三行目、三四九頁下より一行目及び六行目、三五〇頁上より一行目及び下より六行目、三五一頁下より十三行

目)。而して商業資本が生産力に及ぼす影響に此直接と間接の二種あることは之は一般生産力を述ぶる際にも言及してゐるのである。則ち彼は其卸商業を論ずる際に replace の場合には indirectly と云ひ、put in notion の場合には immediately と云つてゐるのである。然らば資本の replacement から來る此間接的影響を標準として農工商の生産力を批判すると如何なる結果を生ずるであろうか、資本流通の經過は商業は工業資本を、工業は農業資本を、農業は工業及商業資本を置き換へて循環するに到るものである。然るにスミスの説によると農業は尤も生産力の大きなものであるからして農業資本を置き換へる工業及び商業資本は最も大なる間接的効果を有し、反之生産力なき小賣商及び手工業者より物品を買ひ入れて彼等の資本を replace する農業資本の間接的効果は尤も劣ると云ふ論理上の歸結を生ずるに至るものである。

第二の資本の回轉數が生産を奨励援助することは之を外國貿易の場合に之を述べてゐる。彼は曰く内國貿易上の資本が一年三回轉すれば出入は六回する。兩地では十二回する。萬一外國貿易に資本が一年に一回しか出又入らないもの

とせば内國貿易上に於ける資本は産業に對し外國貿易上の資本よりも二十四倍の奨励援助を與ふと云つてゐる。(茲に彼は依然奨励援助(Encouragement and Support)と云ふ句を用ひてゐる。而して此は彼が三種の卸商を論ずるに際して資本の回轉に論及した唯一の個處である。而して資本の回轉が資本の働かし得る労働者の數に大關係あるは余の前既に指摘した所である。然るに此場合にもスミスは尚 encouragement and support と云ふ字を用ひてゐるのであるが、而もスミスは彼が此處に資本の回轉數を論ずるのは其回轉高は則ち其資本の使用する労働者の數を直接増加して年收穫を増加する意味である事を遠く第四編に於て此第二編に遡つて言及してゐる。彼曰く、國內消費の爲めの外國貿易に用ひらるゝ資本の維持し得る生産的労働者の數は第二編に説きたるが如く正に資本回轉の度數によるものであると。(Bk. IV, Ch. VII, vol. II, p. 101)。

今スミスが卸商相互の間の生産力の大小を論ずるに際し、外國貿易の場合にのみ特に其生産力の少ない理由として擧げて來た所の此資本回轉高の効果が、かゝる直接効果の意味に解す可きものとすれば、此標準は同額資本の使用し得る労働

量を生産力多少の標準とする點に於てスミスが農工商業の生産力多少の判別に用ひた標準と同じである。亦スミスは如何なる意味に用ひたか明白ではないが彼が工業の生産力を述ぶるに際し、工業資本の大部分は「毎年又はこれより短かき期間に於て」といふ文句を多數各種の労働者を使用するといふ文句に併せ述べてゐる。然らば此資本の回轉數からして農業工業商業の生産力を比較して見てどうかと云ふと、資本回轉數の尤も少ないのは農業でスミス時代に於ける農業資本の回轉數は恐らく普通一回以下であらふ。而して之に次ぐものは工業資本及び商業資本である。現にスミスは國內商業は如何に遠くとも年四回乃至六回轉すると云つてゐる。然らば單に此點から云ふならば生産力の大小は商工農の順序となり正にスミスの述べた所と相反する結論に到達するのである。而して此事は余丈でなくキャナン氏はキャナン版の富國論第三四八頁の脚註に「回轉速度の早きを以て利益とする此理論が本章の最初に於て適用せられたならば農業第一の議論は全然打破されたであらう」と云つてゐる。

以是觀是何の點から見てもアダム・スミスが三種の形式をとる卸商業の産業に及ぼす貢献の度を測定するの標準及び理由として挙げた所は、總て彼自からが前に一般生産業の生産力を論ずるに際し折角築き上げた所論を打破するの結果を生じてゐるのである。

或労働を生産的、又は不生産的としたり、或は各種労働を生産力に従つて配列する Dogma はスミス以後尙長く經濟學上に無用の論争を續けて來たのであるが、近代に到りてかかる論事は漸次其跡を斷ち今日スミスの生産に關する學說中生産論に於て論せらるゝ所のものは分業及び資本論の一部以外又多くを認めぬやうになつて來た。而して今日昔の生産力優劣の争に代つて生産論上に起つたものは生産組織の本質である。左に余はアダム・スミスが商業の組織に付て論及してゐる所を集めて、此方面に於ける彼の思想の一般を窺ふこととする。

## 七

國內商業組織に關してアダム・スミスの論じてゐる所は卸商と小賣商の二つに過ぎない。而して彼が前者の職分の特徴を運送に、後者を分配に在りとしたのは商業組織の發展上注意す可きことである。彼は卸商の職分を以て原料又は製造

品の多量に存在する處より此を必要とする所に運送するに在りとし、(Bk. II, Ch. V, vol. I, p. 340) 其資本は餘剩貨物の交換によつて産業を奨励し、兩生産業者の享樂を増加すと述べてゐる。(Ibid., p. 341) 小賣商業の職分は一定分量の農業又は工業生産物を必要の時に應じて之を所望する人の必要とする小部分に分割するに在る。(Bk. II, Ch. V, vol. I, p. 340) 萬一小賣商がなかつたならば人は牛一頭全體又は一ヶ月又は半ヶ月の糧食全部を一時に買はなければならぬ。其結果は人は生産用に使用する多額の資財を何等の収入を生じない消費貨物に投じなければならなくなる。然るに小賣商がをれば人は日日又は時間時間に購ひ、其資本の大部分は之を資本として生産業に利用することが出来る、此結果彼はより大なる價值を造ることが出来又之によつて得る彼の利潤は小賣商の利潤の爲めに生ずるより高い代價を仕拂ふて餘りがあるのである。(Bk. II, Ch. V, vol. I, p. 341)

此れ則ちアダム、スミスが今日の經濟社會に於て商業組織存在の理由、根據として説いた所であるが、彼が卸商の本質は運送にあり、小賣商の本質は分配にありと云つたのは商業組織發展の上から見て極めて興味ある事實である。現在の發展

した國民經濟に於ては配給組織は非常に複雑となり生産者と消費者との距離は甚しく遠くなつてゐる。今試みに其代表的なもの丈を擧げて見るも購入者、地方間屋、中央市場に於ける間屋(外國貿易には次で更に仲商がある)、分配卸商及小賣商等であるが、スミスは只卸商と小賣商丈しか擧げをらぬ。蓋しスミスの時代にはまだ大規模の大量生産、大中央市場がない爲めに各地に散在する多數の原料及工業生産者から小額宛買ひ集めるのは之れ卸商自からのなした所で、今のやうに特に購入商又は地方間屋の存在する必要はなかつたのである。(Bk. IV, Ch. V, vol. II, p. 33) 而して彼等は多數の手工業者又は農民から自から買ひ集めたものを他の地方に運搬して賣却するを主としてゐたものである。然るに今日の卸商の代表的なるものは大生産者から買受け又は中央市場で蒐集した多額のもの、小額宛分割して小賣商に賣却する所の所謂分配卸商であつて、かのスミスが小賣商の職分として述べた所と同一の職分を行ふものである。此れ當時の卸商の取扱ふ商品は小量であつた爲めに特に小賣商の爲めに分割すると云ふことには大なる意義がなかつたのである。寧ろ一地方から他地方に運ぶ(勿論此際自から運送する

ことを必ずしも必要とはしない點に大なる意義を有してゐたのである。今日でも距離の遠き取引特に外國貿易には大量を分割する爲でなく只貨物の場所的移轉を職分とする所謂仲商が存在してゐる。又之と同一の例は今日國內貿易に於ても例へば日向に木炭又は米を仕入れて、神戸大阪京都に運送し(此際自己の帆船にて自から運搬すると鐵道便によるとは何等本質上の相違を生じない。)其地の卸商に賣却する卸商がある。此種卸商の本質的職分は取扱ひ商品の物量上の不調和を調節するものでなくして、寧ろ場所懸隔を除去する運搬をなすに在るのである。此故にスミスが卸商の特徴は運搬で、小賣商の本質は分配に在りとしたのは當時の商業組織の説明として誤なき所であつて又以て兩者を區別するの標準となすことが出来たのである。けれども此の標準は大量貨物を取扱ふ今日の商業組織上の卸商と小賣商とを區別するの標準とはならないものである。今日大的少量生産の時代ではスミスの時代の如く單に一回の分割丈では消費者の必要とする分量に適當なる丈の小量とはならないで生産者の卸す分量を消費者の必要とする分量となすには數回の分割を必要とするのである。則ち生産者より

大量を引受けた卸商は先づ之を分割しても小賣商の必要に應ずる丈の小量とする。而して此量が尙小賣商に對して大に過ぎる時は大分配卸商と小賣商との間に尙一つの中分配卸商すら生じて貨物を更に之を分割し、而して小賣商は此分量を更らに分割して消費者に引き渡すこととなつてゐる。而して昔時の卸商のなした運搬の職分は今日仲商が之を行つてゐるのである。

## 八

商業組織が今日學術の上から、又屢、實際問題となつて世人の注意を喚起するは商業組織維持の費用換言すれば配給費用の問題である。而して此配給全體の費用は如何なる要素よりなるか、配給組織に於ける如何なる機關が其内最も大なる割合を占むるかを調査し、以て配給費輕減の資料となさんとする運動が盛んに行はれる。而して今日迄の調査の結果を見れば國の内外、商品の種類を問はず全配給費用の内に小賣商業の爲めに生ずる費用が尤も大なる割合を占むることが充分明かにせられてゐるのである。然らばアダム・スミスは此問題に論及してゐるか云ふと、彼は富國論第一編第十章に小賣商業による配給費の比較的大なる事

實と其理由を述べてゐる。

「小さい港町の小食料雜貨店を經營するものは百磅の資本に四五割の利潤を得るに反し、同じ町でかなりの大卸商を經營するものは一萬磅の資本に對してやつと八分乃至一割の利潤を得るのが關の山である」と。然らば何故に小賣商は資本に對して比較的大なる利潤を要求しなければならぬか、彼は其理由を説明して曰く、「食料雜貨商は住民の便利の爲めに必要なものではあるが顧客の範圍が狭い爲めに比較的大なる資本を事業に使用することが出来ない。けれども人は其職業によつて生活しなければならぬのみならず、尙又其職業上必要とする資格相當の生活が營み得られなければならぬ。小賣商人たる爲めには小資本を有する外に尙讀み書き算術が出来なければならぬ。而して又恐らく四五十種の各其種類を異にする商品、其代價、品質、及び此等の商品を尤も廉價に仕入れ得る市場を可なり正しく判斷し得る人でなければならぬ。約言すれば小賣商人たる爲めには大商人たるに要する凡ての資格を必要とするのである。彼が大商人たることが出来ないのは只充分の資本を有しないからである。一年三四十磅と云ふ高はかかる

教養ある人の勞働に對する報酬として大に過ぐると云ふことは出来ない。之れを外見上大であると考へらるゝ利潤より彼の此の勞働の報酬を控除すれば残る處は資本に對する普通の利潤を恐らく出でまゝ」。(Bk. I., Ch. X. vol. I., p. 114) しかし、卸商と小賣商との間に於ける此の總利潤の差異は大都市に於てはさほど甚だしくはない。蓋し大都市に於ては小賣商にも大資本を必要とするから賃銀は其利益中大なる割合を占めないからである。(同上) 此のスミスの議論は一面より見れば小賣商の配給費の比較的高いのは資本の回轉數が少ない結果であると解することが出来るのである。スミスが何處にも言及してゐない事實であるが、抑、小賣商の爲めに生ずる配給費が甚だ多額に上るのはスミスの云るが如く其資本回轉數と大なる關係を有するのであるが、而もそれが小賣商業に於て特に大なる關係を有するのは小賣經營に於ける固定資本の全資本に對する割合が卸商の場合よりも大であると云ふ事實に基くのである。此經營上に於ける資産組織の相違の結果として小賣商の資本回轉總高の大小が特に配給費の上に重大なる關係を有するに到るものである。従つてスミスの考へた如く大都市の小賣商業の勞

働は其資本回轉總高に比すればさほど大なるものでないけれども、而も取引の頻繁なる今日尙且つ全配給費用中卸商と小賣商の占むる割合に大なる相違の存在する所以である。

## 九

配給費の高きことが代價を騰貴せしむる觀あると、又商人が營利のみを目的とする本質のものである結果として今日配給組織の改造を行はんとする議論が盛んに行れてゐる。其一つは生産者と消費者を直接聯絡することによつて商人を除かんとする、所謂直接配給理論又は商人排除運動と稱せらるゝ所のものである。他の一つは今日商人の職分及び存在の必要と理由は之を認むるけれども、しかし其數が多きに過ぐる。商人特に小賣商人の數の多いことは物價を騰貴せしむる原因であると云ふ議論である。アダム・スミスは其國富論第四編に穀物取引を論ずるに際して第一の問題を、第二編第五章に於て第二の問題に論及してゐる。

スミスは當時商人排除の運動の存したことを叙して曰く「古人は其穀物を購ふに際し之を農民より買へば穀物商人よりも安く買ひ得ると信じてゐたやうである。此は商人が自から農民に支拂ふ代金の上に更に不當の利益を消費者より要求することを彼等が恐れたからである。従つて彼等は全然商業を撲滅して仕舞うと努めた。彼等は如何なる種類の商人たるを問はず苟くも仲介商人が生産者と消費者の間に入り來るを阻止せんとした」と。(Bk. IV, Ch. V, vol. II, pp. 29-30)

この議論はこれ農民及び工業職人をして小賣商業を兼營せしむるものであるが、スミスは一つの社會が進歩してゐて既に小賣商業が発生してゐる以上は之を排除するは不利益不當であるとして次のやうな理由を述べてゐる。

今假りに手工業が自から自己の生産物販賣の爲め小賣商を經營するとする、而して此場合其土地の工業及商業の普通利潤が一割とすれば、其各製品の代價には凡て二割の利益を掛けなければならぬ。蓋し其製品を工場から店へ出す時に工業資本に對して一割、店へ運んだ時に商業資本に對して一割を掛けなければならぬからである。若しこれをなさなければ彼は損失するものである。尤も彼は恰かも二重の利潤を得たかの如き觀があるけれども、全體の資本に對しては只一割しか得てをらぬのである。

農夫又之と同一の理由で、自から小賣商業を經營する時は全部の資本を耕作に使用することが出来ない、必ず消費者の需要に對して不斷の供給を確保する爲めに倉庫、牧場に其資本の一部を割かなければならぬ。而して農夫は當然此兩種の資本に對して普通利潤を要求しなければならないのである。果して然らば穀物商人の業務を實際に行ふ處の資本が農夫と呼ばれる者に屬しやうが將た又穀物商人と稱せらるゝ人の手に屬しやうが、何等の相違を生ずるものでない。何れの場合でも、同じく同一の利潤を必要とするのである。而してかかる方法で資本を使用する償として其利潤を其所有者に歸せしむるを要するのである。果して然らば農民は假令自から穀物を消費者に賣却しても自由競争の場合に於ける穀物商人よりも安く賣ると云ふことは出来ないのである。

「否、農夫は單に商人よりも廉價に賣ることが出来ないばかりでなく却つて高く賣らなければならなくなる。」と云つてアダム・スミスは其富國論の最初に論じた分業の利益を此處に引證して來た。則ち若し商人が全資本を只一種の事業に投ずるならば恰かもかの工作者が只一作業のみを専門とする場合と同一の利益

を擧ぐることが出来る。分業の結果工作者が熟練して同じ二本の手で前よりも大なる仕事をなすことが出来るやうにかかる商人は亦賣買取引に熟練の結果同一の資本で以て前より大なる取引をなすことが出来る。従つてより安く販賣することが出来るのである。特に農民をして自から穀物商人の業を行はしむるが如きは最も有害の結果を生ずるものである。則ち此場合には社會は資本の分割より來る分業上の利害を受くることが出来ないのみならず、尙且つ土地の改良耕作を阻止するものである。蓋し同一人が二つの異なる業を行ふ結果として其資本は一部分しか之を農業に使用することが出来ない。又商人が存在する時は農夫は收穫物を即時に商人に賣却し、之を以て更に多くの家畜及び下僕を使用し土地を改良耕作することが出来るのであるが自ら商人を兼ねる場合には之が出来ない。要之自然に發達する分業は社會に利益を與ふるものであるが、かの諺にも云へるが如く「何でもや屋」は決して成功しないのである。(Bk. IV, Ch. V., vol. II, pp. 29-33)

經濟の發達尙甚だ幼稚で、極めて簡單なる配給組織しか有してゐなかつた百五

十年の昔アダム、スミスは既に商人排除の不利益を説いてゐる。其議論は經濟發達の結果特に複雑なる配給組織を必要とする今日、尙漠然たる直接配給を夢むる者に對する當に頂門の一針である。

## 一〇

けれども商人又は商業の必要と云ふこと、幾何の商人又は商業を必要とするかと云ふことは自から別個の問題である。現に Quesnay 氏の如きは小賣商人の數餘りに多きを難じてゐる。蓋し小賣商人の數の多き結果は一人當りの販路を狭くして資本回轉總高を減じ収益を少なくせしむる。而してスミスの言葉を借りて云へば人は其職分によつて生活しなければならぬからして商人はかかる場合一個當りに付て多額の利益を消費者に要求しなければならぬからである。此問題に對してはスミスは第二編第五章に於てかかる理論の當らざる旨を論じてゐる。則ち曰く、小賣商業の存在する時は人は一時に數ヶ月の消費品を買溜め置く必要がないからして、其資本を生産に利用して利益を擧ぐることが出来る。而して其利益は商人の利潤による物品代價の騰貴を補ふて餘りあるからしてかの一部論

客の小賣商店に對する僻見は根據のないものである。又商人の數を制限する何等の必要も存在しない。蓋し、小賣商人の數の増加は商人相互に害し合ふことはあつても、公衆を害することはあり得ないからである。例之特定の一つの町に賣却し得る食料品雜貨の量は其町及び附近の需要によつて限定せられてゐるものである。従つて食料雜貨商に投ずる資本の高は又此の分量の購入に足る資本の高を超過し得ないものである。此故に假りに此の定量の資本を二人の雜貨商で分擔經營するものとせば其間に自から競争を生じ、其結果は商人一人の場合よりも商品の代價を安からしむる傾向を有する。若し又十二人の同業者があるとするれば、それ丈其間の競争は烈しくなる、又代價引上の目的のために團結するの機會もそれ丈少くなるものである。かかる競争の結果は一部の同業者は自から破綻を來すかもしれない、けれども之を注意するのは當業者其者の任務であつて、それは宜しく彼等の自由判斷に委して可なりである。商人の競争は何等消費者を害することともなければ又生産者をも害しないものである、否却つて其商業が一二のものに獨占せられてゐる場合よりも消費者には安く賣却し、生産者よりは高く購ふ

に到らしむるものである。(Bk. II, Ch. V, vol. I, pp. 341-342)

内國商業政策に於て近時特に問題となるのは代價調節策、公定代價制度の問題である。而してアダム、スミス又其富國論第四編に穀物取引を論ずるに際して此問題に論及し、英國正統學派一流の論法を以て全然之を排斥してゐる。而して其論據とする所は代價の自然的調節とも稱し得可き所のものであつて、個人的利害と一般の利害の一致す可きことを理由としたものである。

穀物商人と一般公衆との利害は一見相反するやうであるが、實際に於ては全然一致するものである。蓋し此れ商人が代價を引上げるのは其供給の不足に應ずる程度に限るのであつて、此以上に引上げることは商人の利益を増進する所以でないからである。商人が代價を引上げるのは供給の不足を知るからである。而してかかる代價の引き上げは消費者をして其需要消費を節約せしめ以て新收穫に到る迄供給に甚だしき不足を生ぜざらしむるに到るものである。然るに商人が供給不足と知りつゝ、尙且つ代價を引上げない場合には彼は自から儲け得可き

利潤を損するのみならず、尙消費者が消費を制限しない爲めに前年の收穫は季末に際し早くも品不足となり急激の暴騰又は時に飢饉を發生せしむるに到るものである。此故に供給不足に際し消費者が始め少々高き代價を支拂ふの苦痛は、然らざる場合に生ずる飢饉の災害に比すれば云ふに足りないものである。若し又商人が供給不足に相當する以上に代價を引上げる場合には公衆を害するばかりでなく彼自身亦損害を蒙るものである。蓋し代價暴騰の結果は當期の穀物の供給を甚だしく喰ひ延ばす爲めに商人は長き期間に亘る穀物の減損より來る物質的の損害を受くるのみならず、又季末又は次季の始めに大暴落を來たして大損害を受くるからである。而して商人は日常熱心に收穫高、毎月毎週毎日の賣行を注意してゐる結果相當正確なる知識を以て賣買取引に従事し、代價を定むるものであるからして、其結果は期せずして其期の收穫高を機に應じて一般に徐分割販賣し、社會全般の消費に合致せしむるものである (Bk. IV, Ch. V, vol. II, pp. 25-26)。此故に政府が其正當と想像する一定の代價で穀物を販賣す可きことを商人に命ずるが如きは是れ大なる誤りである。其結果は却つて商人に賣惜の念を生ぜしめ

て穀物を市場に出さないやうにするものである。若し又商人が市場に持ち出し販売した場合には此に依つて急速なる消費を奨励し、爲めに季末前に飢饉を發生せしむる憂がある。此故に穀物取引を無制限、無拘束に自由ならしむることは飢饉の災害の襲來に對する唯一の有効なる防止策であると共に、又缺乏不足の苦痛に對する最良の輕減策である。蓋し眞の不足は補充し得ず、只輕減し得るに過ぎないからである。 (Bk. IV, Ch. V, vol. II, p. 28)

けれどもアダム、スミスは如何なる場合でも代價の騰貴は國民全體の利益と一致するものであると説いたのではない。彼は大會社が一國の全收穫を自から買ひ占め得るやうな場合にはかの和蘭人が Moluccas の香料の値を高める爲めに其の大部分を燒棄したやうなことをやるかも知れない。しかしこれは獨占の場合に限るものである。然るに穀物は其性質上獨占の甚だ困難なるもので、假令自由取引を許しても其危険の殆んどないものである、此れ全國に亘る穀物買占には大資本を要すると、其產地全國に散在し、其利害關係者多き爲め此等の多數を團結することが困難であるからである。 (Bk. IV, Ch. V, vol. II, pp. 26-27)

以上の説による時は獨占の行はれない場合(彼は穀物は獨占の行はれない場合と認めてゐる。)には代價公定とか穀物管理とか云ふ政策を行ふ必要は存在しない。代價其物が需要供給を自然的に調節せしむるもので、之に人為を加ふるは却つて不幸なる結果を生ずるものと論じてゐるのである。思ふに資本主義の社會に於ける代價形成が需要供給を自然的に調節する作用に到りては微妙の極に達したるが如き觀がある。則ち代價の騰貴は一方にスミスの云へるが如く消費を制限して需要を減ずると共に、他方には從來の代價では市場に持ち出すを肯んせなかつた商人を驅りて其貯藏品を市場に出さしめ、更に又將來の生産を刺戟して供給を増加せしめ、かくて需要供給双方より互に歩み寄よつて遂に其一致を見るに到るものである。又代價低落の場合には需供各前と正反對の變動を起して之亦需給一致するものである。けれどもかかる理由からしてスミスが云へるが如く代價公定又は調節、穀物管理を絶對的に否定せんとするは誤りである。思ふに茲に一原因あれば直ちに第二の結果を生じ此の第二の結果は更に原因となりて第三の現象を生ずるが如く説くのは是れ常に英國正統學派の演繹的机上論の

特徴である。かの代價の自然的調節を根據として代價公定、又は穀物管理の無用を説くが如き亦此一例である。蓋し斯の如き議論は、(第一)代價騰貴は各方面にかゝる影響を惹起して、結局需供を一致せしむるとするも、かかる結果を生ずる迄には長き期間を必要とするものである、而して彼等は此間如何なる一般的の災害、其他の社會事變、現象の起るやを考慮しないものである。(第二)彼等は消費の社會的節約に横斷的節約と縦斷的節約の區別あることを無視してゐる。而してかの代價騰貴による節約は後者に屬するもので節約するものは下層社會の者に限られると云ふ事實を看過してゐる。故に供給甚だ少くして代價甚だしく騰貴する場合には下層社會の者は食を絶たれて餓死するの外はあるまい。而して此場合にも亦スミスの期待せるが如く消費の制限需要減少となりて最後に需供は一致するであらう。而して尙一致しない場合には購買力なき無産者階級の消費は益々制限せられ、彼等は漸次餓死することによつて現存せる供給と需要は(而してそは資産階級のみ)一致するのである。換言すれば需要供給を一致せしむる爲めに代價の騰貴といふことを是認するのは無産者階級の消費を制限し、極端に云へば

彼等を餓死せしめて需要供給を調節するといふ事を是認するのである。資産者階級の需要慾望に満足せしめんが爲めに無資産階級の餓死を要求するものである。かかる無制限なる代價の自然的調節と云ふ議論は既に人道上的理由から許す可からざるものたるや贅言を要しない。則ち横斷的消費節約を強制する必要の存する所以である。

## 二二

アダム、スミスの商業に關する思想中最後に残つてゐるものは彼が商人及び商業に對して如何なる感情を有してゐたかと云ふ問題である。此問題は屢々商業研究者によりて口にせられる所で、且人によりて其見る所を異にしてゐるのである。従つて充分なる研究をなさんとするには尙相當の頁數を費やさねばならぬものであるが、余は初めの商業の生産力を論ずる爲めに大半の頁數を費やしたため茲に此問題に就き充分のことを述べる事が出来ないが左に簡単に之に關するスミスの考を述べて本論文を終ることとする。

スミスは商人又は商業に對して好き感情を有してゐたか、或は又は惡しき感情

を有してゐたか、アダム・スミスは商業に對して好意を有したと云ふ者に Ehrenberg  
がある。彼曰く…… und dem Handel überhaupt war er sehr freundlich gesinnt,……。ア  
ダム・スミスは商人に對して敵意を有したりとなすものに Buri がある。曰く、  
Den Kaufleuten ist Smith indessen im allgemeinen nicht wohl gesinnt。更に又スミスは商業の利  
益効果を認め、しかし商人の利己心を批難したとなすものに Sieveking がある。曰く、  
Adam Smith liess, wie dem Gewerbe, so auch dem Handel grössre Gerechtigkeit widerfahren,  
doch sind auch nach seiner Meinung die Kaufleute mit ihrer Gewinnsucht schuld an den die Konkur-  
renz einschränkenden Massnahmen des States.

斯の如く學者がスミスを讀みて彼の商業又は商人に對する感情を種々異つた  
感想を懐くは何故であるか。此を知らんとするには吾人は先づスミスが到る處  
に商業と云ふ文句を用ひる時に如何なる意味に解したかと云ふことを知らな  
ければならぬ。

スミスが商業と云つてゐる時には彼は必ずしも後世の學者が述べてゐるやう  
に職業的概念としての商業則ち商人の商業を意味してゐるのではなくして、屢々交  
換の事實其物を指してゐるのである。(註)例之彼が「各文明國の主なる商業は都市  
と田舎の住民の間に行はれる農産物と工業生産物との交換である」(Bk. II, Ch. V,  
vol. I, p. 354)と云へるが如き、又は「人は斯の如くして交換によつて生活す、則ち或る  
程度に於て各人皆商人となるものである、而して社會其物は本來一つの商業的社  
會となるに到る」(Ibid., vol. I, p. 24)と云へるが如き、更に又「原始社會に於ては家畜  
は普通一般に行はるゝ商業上の用具(Common instrument of commerce)なり」(Ibid., p. 25)  
と云へるが如き、何れも皆スミスが交換即ち商業と云ふ考を懐いてゐたことを示  
してゐるものである。而して彼は富國論中到る處に市場(Market)と云ふ文字を用  
ひてゐる。例之都市は田舎の生産物の餘剰に對する市場であるとか、又は殖民地  
は本國の生産物の市場であるとか、云ふ時に彼は交換の場所又は販路を意味して  
ゐるのである、而してそれは必ずしも所謂商人の市場ばかりでなく、尙生産者及び消  
費者の市場等全體を意味してゐたのである。此故にスミスが Commerce と云ふも  
Market と云ふも同一の事實を見方を異にして名づけたもので、彼の頭にある處の  
考は常に交換其物に外ならなかつたものである。

(註) 三田學會雜誌第十七卷第三號拙稿「組織觀念としての商業」參照。

然らば此意味の商業に對してアダム、スミスは如何なる態度を持つてゐたか云ふと、彼は殆んど無條件にかかる商業の價值を肯定せざるを得なかつたのである。彼等がフィジオクラットに反對して商業を工業と共に國富増進のために必要なものとし、農業と共に其生産力を認めたことは前述した所である。けれどもスミスがかかる説をなすのは社會に交換と云ふ事實を前提としてからのことである。故に余はアダム、スミスの經濟學に於て、交換又は彼の所謂商業の如何なる地位を占むるか。何故に彼は之を重要視しなければならなかつたかと云ふことを一言して見たい。而してそは彼の經濟學に於て尤も根本的なものである。蓋し彼は國富の増進は價值の増進であると云つてゐる。而して又分業は國富増進の重大なる手段であると云つてゐる。而して交換又は商業と云ふことは此の二つの問題と彼の考によれば避く可からざる關係を有してゐるからである。而して交換と前者との關係は價值關係で、後者との關係は物質的關係である。スミスが生産的勞働と云つたのは物質的財貨の價值を増加する勞働を指すも

のであることは前述した通りである。然るにスミスが價值と云つてゐるのは交換價值則ち他の財貨を購買し得る力である (Bk. I, Ch. IV, vol. I, p. 30)。故に財貨が勞働の結果價值を増加すると云ふのは交換と云ふことを前提とし、かかる財貨を必要とし欲する人があるからである。而してかかる財貨を産出すること困難なる地位に在る人、換言すれば當該財貨を必要とする人の數が大なれば大なるほど、更に云へ換へれば市場が大なれば大なるほど其財貨は大なる價值を有するに到るわけである。従つてかかる財貨を造り出す勞働も亦従つて大なる價值を増加するに到るものであると云ふことが出来る。茲に於てかアダム、スミスが勞働の量が大なれば大なるほど一國の年收穫は増加すると云つたのはかかる財貨に對して市場の存在することを前提として始めて云ひ得る言であること云ふことが出来る。従つて亦市場の發見擴張は一國の富を増加する所以となるものである。則ちスミスが第二編に生産力を論ずるに際して、特定の産業の生産物が其國の需要の必要とする高を超過する時は其餘剰は之を外國に輸出し、而して自國に於て需要ある或る外國品と交換することを必要とする。若し此際輸出をしない

ならば其國の一部分の生産的勞働は停止せられ其年收穫の價值は減少するに到ると云つてゐるは尤も明かに上述の關係を言ひ表はしたものである。(Bk. II, Ch. V, vol. I, p. 352)。而して此關係は國內に於ても亦全く同一である。(Bk. III, Ch. I, vol. I, pp. 355-356)

國富は生産的勞働の量及び勞働者の生産能力によることは既に屢之を説明した。而して生産能力は器械器具の増加及び改良及び分業によること又既に説明した。但しスミスが勞働者の生産能力増進方法として器械及び器具に就ては特に論じてゐない。之を論じてゐるのは分業丈であるが、彼が生産能力増進方法としてどれ位分業に重きを置いたかは、彼が富國論の卷頭第一に之を論じてゐるのを見ても之を知ることが出来る。「種々あらゆる方面に於ける技術上の生産が大なる倍數的增加を來たしたのは是れ分業の結果である。此の爲め治世の效擧がれる國に於ては富は最下層社會に到る迄一般に擴がるに到つた」と。(Bk. I, Ch. I, vol. I, p. 12)

斯の如く勞働者の技術上の生産能力を高むる分業はスミスの考によれば交換

の如何市場の大小によつて左右せられるものである。市場大なる時は大に分業を行ひ得可く、市場狹隘たる時は之を行ふこと困難なるものである。(Bk. I, Ch. III, vol. I, p. 19) Bücherも既に指摘してゐるやうに分業と交換は必ずしも必然的關係を有してゐるものではない、共同經濟内に於ても尙分業は行はれ得るものであるが、それは兎に角としてスミスは分業は市場によつて規定せられるものと考へた。既に然らば國富増進上に於ける最大原因の一たる分業の必要條件たる市場又は交換に對してスミスが反對する謂はれは全然存在し得ないのみならず、否大に其必要を説かざるを得ないのである。又實際如何に彼が商業を尊重したかは、彼があつた位自由主義を尊び國家の權力を制限したにも拘はらず尙一國の商業に便する事實施設をなすを以て國家の職分となしたる一事に見るも充分之を察知することが出来るのである。(Book V, Ch. I, vol. II, p. 214)

依是觀是商業はスミスの經濟理論、經濟思想の根底をなすものである。かのThrenbergが「彼の經濟理論は商業國家の基礎の上に於てのみ成立し得可し」と云つたのは決して過ぎたるの言ではないのである。

アダム・スミスが商業を斯の如く見る以上は、自由主義個人主義の立場に立つ彼が商業を専門とする商人を輕蔑すること亦有り得ないのである。否アダム・スミスは商人を蔑視し、無視する當時の世論、法律に反對して大に商人を辯護してゐるのである。則ち彼は商業の生産に及ぼす効果を説いて後曰く、かの二三政治論者の小賣商人及び小商人に對する僻見の如き全然根據ない所のものである。商人の數の増加は假令商人相互間に不利を生じても公衆を害するものでないからして、此理由の下に此等商人に課税し、又は其數を制限するが如き全く不必要なことである。』(Book II, Ch. V, vol. I, p. 34) 彼は更に商人の個人的利益と大多數の公衆の利益とは正確に一致 (exactly the same) してゐるものであると説いた。其理由として彼は吾人が前段に説明した代價の供給調節作用を述べた、則ち商人が代價を高むるに於ては消費者をして消費を節約せしめ需要供給を一致せしむる。然るに若し商人が代價を高めざるに於ては例之穀物の如きに於ては端境季節に既に消費し盡されて飢饉を惹起せしむる。故に代價を騰貴せしむる時は一般民衆は苦しむも、其苦しみは然らざる場合に生ずる飢饉の苦しみよりは遙かに輕微である。

ある。けれども商人は必要以上に代價を騰貴せしむる時は消費の制限多きに過ぎ自己自から又損失を蒙るに到るから供給不足に適應する以上に代價を騰貴せしむることをしない。商人の代價左右は斯の如く穀物飢饉防止の作用を有するからして穀物商業は就中最も法律上の充分なる保護に値ひし、又民衆の憎惡の的となるからして特に保護を加ふる必要があると論じてゐる。(Bk. IV, Ch. V, vol. II, p. 28) 更に彼は穀物商人が、不作の歲に異常の高利を貪るをすら辯護してゐる。曰く、穀物の供給少ない年には下層社會の者は代價の騰貴を商人の責に歸するから、商人は彼等の憎惡憤怒の目標となり、爲めに其商店は破壊掠奪せられる。處がかかる年は此等商人に採りては、主要なる利益を擧げ得る年である。蓋し此等の商人は農民より數年間一定量の供給を一定の代價で引渡を受くる約束をしてをる故、代價騰貴の年には大に利することが出来るのである。けれども穀物は性質上自然的に減損してゆくものであり、又其代價は不時に變動ある爲めに普通の年は儲からないものである。古から此商業で大資産を造つた者の稀である事實が其證據である。況んや唯一の儲け得る年には掠奪の危険があるからして、普

通の人々は穀物商業を好まない……と云つて、スミスは從來の政策が商業を保護せず、却つてかかる民衆の商人憎惡の念を助長したことを難じてゐるのである。(Bk. IV, Ch. V, vol. II, pp. 28-29)

然らば彼は全然商人を憎まなかつたかと云ふとそうでない。時に彼は甚だしく商人を罵倒してゐる所がある。そこで問題は彼は一面には以上述べた如く極度に迄商人を辯護してゐるのに、他方面に於て惡罵してゐるのは何故であるかと云ふことである。而して彼の考へ方は詮する所こゝである。生産の目的は消費である。故に生産は消費に支配せらる可きものである。而して一般國民の消費は自由競争によつて尤も低廉に之を充たすことが出来るのである。之に反して獨占の場合には代價騰貴して一般消費者の利益は害せらる。而して從來消費者の利益を害する獨占の制度を造つた者は利己心に馳られた商工業者である。従つてかかる商工業者は惡む可きものであると云ふのである。今此主意をスミス自身の言葉でもつて説明して見よう。則ち彼曰く「消費は凡て生産の唯一の終局にして又目的である、而して生産者の利益は只消費者の利益を増進するに必要な

る程度に於てのみ考慮せらる可きものである」。(Bk. IV, Ch. VII, vol. II, p. 159) 而して如何なる國に於ても人民大多數の利益とする所は最も安く賣却するものより其欲する貨物を購ふに在る……然るに商工業者の利益は此點に於て人民大多數の利益と直接相反するものである」(Bk. IV, Ch. III, vol. I, p. 458) 蓋し商工業者は利益を求むることを直接其目的とするものである。而して「獨占の地位にある者はあらゆる場合に於て最高代價を要求し得」(Ibid. p. 63) を以て「商工業者は何れの國に於ても國內市場を獨占するを以て其利益とするものである」からである。(Ibid. p. 458) 一般消費者の利益を害する Mercantile System を建設したものは則ち獨占によつて利益を得る商工業者である。(Bk. IV, Ch. VIII, vol. II, p. 160) 故に「此制度の下に於て主として奨励せられて居るものは富者及び強者の利益の爲めに經營せられる産業である。貧困者を利する爲めの産業は等閑に附せられてゐるか、又は抑壓せられてゐる」(Ibid., p. 143)

此に依つて見ればアダム・スミスは商業及商人に對しては常に好感を有してゐたのである。只商人特に大商人、保護會社が獨占的地位を占むる場合にのみ之に

反對したのである。然らばスミスは商業の利益と獨占の不利益とに何れに重きを置いたかと云ふ彼は尙前者に重きを置いたのである。換言すれば獨占は不可なるも商業の利益は其不利を償ふて餘りあると云ふにある。則ち彼曰く、吾人の注意を要するのは殖民地貿易の影響と其貿易の獨占より生ずる影響とを區別するに在る。前者は常に必ず有利である、後者は常に必ず有害である。貿易の利益は甚だ大なるもので、假令それが獨占であつても、又獨占の有害なる影響はあるにしても而も大體に於て利益であり大なる利益を齎らす。尤も其利益の度は獨占の伴はない場合に比すれば甚だ劣るものである」と。(Bk. VI. Ch. VII, vol. II. p. 109.)

(完)

マーカンチリズムとアダム・スミス

高橋誠一郎

羅馬帝國の崩潰、蠻民侵略の時代に於て歐洲の交易は衰頽し去つて殆んど消滅するに至つた。而して社會が田園的、封建的基底の上に改造せられたる時、莊園及び其の他の地方的單位は經濟的自給自足を原則とせる社會的獨立の單位として組織せられ、又た出來得る限り斯くの如き基礎の上に維持せられた。彼れ等の間には正規の交易的關係を生せしむるが爲めには、習慣と所要との類似が餘りに大であり、分勞の發達が餘りに不十分であつた。固より如何なる時代に於ても幾分の交易は存して居つた。金屬、鹽、參兒、毛皮、干魚及び其の他の物品は屢々遠隔の地方から誘致せられた。遠國よりの精巧なる織物、酒類、香料、寶石及び雜多なる物産に對する需要は猶ほ全然消滅し去ることがなかつた。然も尙ほ中世初期に於ける